

時代の変化を恐れず、時代に合った商売を常に追い続けて131年

Vol.68



▲写真中央が初代 新三郎



▲昭和30年代前半。ダイハツ・ミゼット(自動三輪車)に米俵を積んで配達に出かけていた。

(株)吉字屋穀店は明治22年、初代 飯島新三郎^{しんざぶろう}が長年働いていた甲府の老舗問屋である吉字屋本店から暖簾分けを許され、甲府市若松町(現在本店がある場所)にて、米の商売を手掛けたことに始まる。当時は、「横町のお米屋さん」として、町の人々に親しまれていた。

新三郎の子、米太郎(二代目)が継いだのは、大戦の暗い影が世の中を覆うようになった頃だった。太平洋戦争が始まり、昭和17年から食糧管理法のもとで国中の米は管理され、政府が生産者から直接米を買い取り、食糧営団から町の米屋に米が流れ、消費者に販売するという施策がとられていた。販売と言っても自由に売ることが出来たのではなく、各家庭に配布されていた米穀通帳で決められた

量のお米を販売する配給制であり、飯島家は町内の食卓を支える重要な役割を果たすことになった。物資は絶対的に不足していたため、闇取引も横行しており、時には、甲府駅で押収されたヤミ米を配給分に回すこともあったという。そんな暗い時代の中でも、吉字屋穀店は、横町のお米屋さんとして米を提供し続けた。しかし、戦火は容赦なく甲府の街を襲い、昭和20年の大空襲で吉字屋穀店の店舗は全焼してしまう。米太郎は、敗戦の焼野原に簡単な木造家屋を立て、ほろきやたわし、石鹸などの荒物(雑貨)を売り始めた。

収束した頃のことだ。この頃、米は依然として配給制で、吉字屋穀店を含む若松町、青沼、朝気等の米屋12件で青沼米穀商協同組合を組織して、一帯の家庭に米の配給を続けていた。

その後、配給制度が廃止となり、自由販売が開始になると、荒物販売の横で米の販売を再開した。当初は、組合でその地域ごとに得意先を振り分けて商売をしており、自転車に米3俵を乗せたりヤカーを付け、配達に出かけることもあったと言う。

ところで、最近あまり耳にしなくなつた米の単位「俵」は一体どのくらい重さなのだろうか。四代目の潤社長は、こう教えてくれた。「1俵が約60キロです。ですから、3俵は約180キロになります。」

人々の生活が少しずつ豊かになり、町に食堂が増え始め、温泉地が観光地として賑わいを見せ始めると、義雄は、果敢に営業先の開拓に乗り出した。その行動が時代の先を行き過ぎていたがゆえに、当時、業界の異端児と呼ばれていたという。義雄会長は、「高度成長期に入り、お米の需要も上がってきて、今までと同じ商売を続けていてはダメだと思いましたよ。始めは周りの抵抗もあったが、嘘をつかない、真面目な商売を一生懸命したことの結果がついてきた。」と話してくれた。

時代の先を見据え、販路を開拓してきた父親の背中を見てきた現社長潤(四代目)が会社に入ってから、店舗展開、全国の米屋に先駆けてネットショップを開設と次々に先手を打ってビジネスモデルを確立してきた。さらに、現在は酒米の精米事業や、山梨県産米の米粉を菓子店などへ供給する事業も手掛けている。常に新しいビジネスモデルを開拓していかないと、競争の激しい時代の中で淘汰されてしまうという危機感からだ。

「私たちの業界は、流通の垣根がないのが常識で、競争が激しい世界です。川上に乗って米の生産にかかわるか、川下につけて加工技術を磨き、販路を拡大するかを常に模索しています。同じことをしていても、潰れてしまう。」と潤社長は分析する。

競争の激しさを物語っているかのよう。現在、県内に米屋は数件しか残っていないと言う。今や地域のみならず、山梨県内の米文化を支えていると言っても過言ではない、吉字屋穀店。時代に合った商売を追い続け、横町のお米屋さん^{さん}の歴史は、これからも続く。

(株)吉字屋穀店

代表取締役 飯島 潤

創業 明治22(1889年)

甲府市南口町3番8号

TEL.055-233-6775 (代)